

批 評

ラッファアー氏の新著『シノ、イラニカ』に就いて

(Lauter: Sino-Iranica. pp. 185-630. 1919)

文學博士 桑 原 隲 藏

この早春に米國市俄古の Field Museum of Natural History 出版の考古叢書の一編として世に公にされた、前掲の新著は、近年發行された東洋史關係出版物の中で尤も注意に價すべきものと思ふ。著者ヘルトルド、ラッファアー Berthold Lauter 氏は現在

九一四年に世を辭した唯一のロックヒル Rockhill 氏を除けば、過去に於ける米國の支那學界は甚だ寂寞を極めたことは、米國の學界でも公認して居る。この間に於てラッファアー氏の存在は、米國の支那學界にとつて、大なる誇といはねばならぬ。

米國の支那學界に於ける一大明星である。過去の米國にはウエルス、ウイリアム Wells William 氏が出で、マルチン Martin 氏も出た。されど彼等は嚴密なる意義に於ける支那學者と稱し難い。西紀一

米國現時の支那學界には、ラッファアー氏以外にヒルト Hirth 氏があり、又フォルケ Foltke 氏がある。ヒルト氏は支那學者の先達として、その大名世界に鳴つて居るが、最早頽齡に近く、前年コロンビア大學を退隱された程で、今後に於ける業績

は到底既往の如きを望み難い。フォルケ氏はカリホルニア大學に教鞭を執られて居るがその業績の發表は過去に於ても、現時に於ても、寧ろ稀少と思ふ。獨りラッファアー氏はこの二氏と異り、或は考古學上の、或は言語學上の、幾多注意すべき論文を陸續發表されて居る。佛蘭西のペリオ Pelliot 氏と相並んで、現時の學界に尤も活躍し、又將來の學界に尤も囑望されて居る支那學者である。吾が輩は去る三月にラッファアー氏よりこの新著一部を惠贈されたから、早速通讀一過の後、之に關する感想を送り、併せて日本の雜誌にこの新著を紹介すべきことを申添へて置いた。今回の起稿は全くラッファアー氏に對する約束の履行に外ならぬ。

さてこの新著『シノ、イラニカ』は支那の古記録に見えたる波斯を、主としてその植物及び産物の方面より研究した物である。張騫の鑿空以來、イラン地方に關する記事は支那歴代の正史に見えて

居る。イランと支那との交渉は、政治的にも經濟的にも宗教的にも將た藝術的にも、可なり深く且つ長い。支那の文化は世間普通に想像さるゝ程、爾く孤立的のものでない。支那人は保守的ではあるが、長い年月の間には、彼等固有の文化の裡に外來の文化が尠からず浸潤して來て居る。彼等の言語なり思想なり服飾なり、學問、藝術、宗教等各方面に涉つて、顯著なる外國の影響を認めることが出来る。唐の文化は後代の羨稱する所であるが、この文化も決して支那固有の文化の發展でない。唐代の文化の特色は、印度文化とイラン文化が著しく支那文化に影響した點に在る。外來文化の影響を度外視しては、決して支那文化の真相を窺知することが出来ぬ。

過去の支那に影響した主要なる文化は、申す迄もなく印度文化とイラン文化である。印度文化の影響は世間に周知されて居るが、古代の波斯

即ちイラン文化の影響も亦、印度のそれに格別

劣らぬ筈と思ふ。兎に角支那とイランとの文化

的交渉は、東洋史の中でも可なり重要な問題

である。この重要にして然も従來等閑に附せら

れた問題が、縦令制限された局面に於てとはいへ

ラッファア氏の如き有力なる學者によつて、新に

研究の手を着けられたことは、實に學界の一大慶

事といはねばならぬ。殊にその新研究が容易に他

人の追従を許さぬ程、偉大な業績を膾ち得たこと

は、一層學界の爲に祝福せざるを得ぬ次第であ

る。ラッファア氏自身は、この新研究の目的は、必

しも支那に於けるイラン文化の影響の甚大なるこ

とを證明するにあらずして、較る支那の古記録が

如何にイラン古代の文化を探討すべき貴重なる材

料を供給するかを證明するに在るといふが、吾が

輩にとつては前者が一層興味深き問題で、然もラ

ッファア氏の研究によつて、この問題も可なり十

分に解決されて居ると思ふ。

## 二

『シノ、イラニカ』は約四百五十頁の大著で、緒論、本論、附録、索引の四部に分かれて居る。

### I 緒論 (pp.185-207)

(a) イラン文化の中亞及び東亞に及ぼした影響の多大なること (b) 古來東西兩洋の文化の媒介者の位置に立つたイラン種族の文化を闡明するは文化史上意義多きこと (c) 而してこのイラン種族の文化を闡明するには支那文献を參考する必要あること (d) 支那文献は古代のイランの植物、動物、物産、礦物、風俗、制度の各方面に涉つて重要な材料を供給すること、(e) 支那人の外國語を音譯するには嚴密なる一定の法則があるから、支那音譯のイラン語を取扱ふ場合にもこの法則に注意を要すること (f) されど言語上の比較は研究の一面に過ぎぬ。

著者ラッファア氏の尤も力を盡した點は、植物、藥

種、産物、礦物、金屬、寶石、織物等の波斯より支那に將來された歴史 (Sino-Iranic) 及びその反對に支那から波斯に傳來した歴史 (Irano-Sinic) を釋ね明にするに在ること、(g) 支那の記録に外國傳來の植物には、一般に胡桃、胡麻等の如く、胡の字を添加するも、胡は北狄をも意味する上に、時には支那固有の植物にても胡蘆、胡頹子等あれば單に胡名を負ふる植物にても、直にイラン傳來のものゝ速斷し難きこと等、すべてこの新著編纂の目的方法に關する大體の抱負を述べてある。

## 三

## II 本論 (pp. 208-571)

(A) 支那に移植された若くば支那の記録に見えたイラン地方の植物、(pp. 208-467)

苜蓿、葡萄、胡桃、石榴等の約五十種の傳播の來歴を廣く東西の史料を利用して考證したもので史學者にとつても、植物學者にとつても、興味深

く且つ裨益が多い。紙數の制限もあれば、茲にはその四五種の梗概を紹介するに止めようと思ふ。若しその一斑によつて、全豹を髣髴し得ば、望外の幸と申さねばならぬ。

(1) 苜蓿 ラッファアー氏は世界古代の文献より歸納して、苜蓿の原産地をイランと斷定して居る。

さて支那の苜蓿の語源に就いては、トマシエック Tomaszek 氏は裏海附近のギーラキ語の Buso, キングスミル Kingsmill 氏は希臘語の Medikai をヒルト氏は土耳其語系の Bucak を擬して、學者の所説が一定せぬ。ラッファアー氏は大體に於てトマシエック氏に賛同して苜蓿は東方イラン語の Mulsuk 又は Busuk の音譯で、ギーラキ語の Buso はその名残ならんと主張して居る。

明の李自珍の『本草綱目』卷廿七に『金光明經』を引き、苜蓿の梵名として塞鼻力迦を擧げてあるがラッファアー氏に據ると塞鼻力迦はイラン語 Siburga

の音譯で梵語でない。イラン語で *z* は *z* を謂ひ、*Banga* は葉をいふ。塞鼻力迦は即ち三葉の義である。

(2) 葡荷 『史記』や『漢書』の蒲陶(葡荷)はトマシ  
エクス氏やキングスミル氏以來、希臘語 *Botrus* の音  
譯と認められて居るが、こは極めて信じ難い。吾  
が輩は已に「張騫の遠征」(『續史的研究』一四四—  
四五頁)中に、この説に就いての疑惑を述べて置  
いた。露國のバルトルド *Bathold* 氏も亦吾が輩と  
は獨立に、略同様の意見を立て、蒲陶の語源は今  
日最早知られざる古代のイラン語中に求むべきも  
のと主張して居る。(The Encyclopaedia of Islam  
vol. II. p.62) ラッファア氏は更に一步を進め、葡荷  
は希臘より亞細亞に傳來せしものでなく、却つて  
亞細亞より希臘に傳來した事實とイラン地方に於  
ける希臘語の影響甚だ尠ない事實を根據として、  
張騫が西域より希臘語を其儘、支那に輸入する事

の到底不可能なるを斷じて、強硬に葡荷 *Botrus* 説  
を否定して居る。氏は葡荷を *Eudima* 又は之に類  
似するイラン語の音譯と認め、葡荷を意味する近  
代波斯語の *Bida*、葡荷酒の容器を意味する中世波  
斯語の *butik*、近代波斯語の *butye* とも間接の關係  
あるべしと推測して居る。

葡荷は漢代から支那内地に移植されたが、主と  
して果實として賞翫され、造酒には使用されな  
かつた。西曆九世紀の半頃のアラブ商人の記録にも  
支那人は葡荷酒を造らず、又外國の葡荷酒もこの  
地に輸入されぬとある。事實アラブ商人の多く來  
集した南支那では葡荷酒を飲用せなかつた。され  
ば『唐會要』卷一百に、太宗時代のことを記して、  
葡荷酒西域有之。前世或有貢獻。及下彼高  
昌。收馬乳葡萄實。於苑中種之。并得其酒  
法。自損益造酒。酒成(中略)頒賜群臣。京中  
始識其味。

とあれば、北支那では後くも唐初から葡萄酒を製造したこと疑を容れぬ。元明時代にかけて、山西の太原附近が葡萄酒製造の本場であつた。斯てラッファア氏は元代の和斯輝の『飲膳正要』や、明初の葉子奇の『草木子』や、又はマルコ、ポーロ Marco Polo の記録により、太原の葡萄酒に關する興味多き記事を紹介して居る。

ラッファア氏は印度に於ける葡萄及び葡萄酒の來歴にも論及して居るが、茲にはその紹介を割愛せなければならぬ。たゞ唐の玄應の『一切經音義』卷二十四の『阿毗達磨俱舍論』卷十四に、

- (a) 窳羅 米酒也 (b) 迷麗耶 根莖花葉雜酒也  
(c) 末陀 蒲陶酒也

とある窳羅は梵語 Sura 迷麗耶は梵語 Maireya 末陀は梵語 madhu の音譯で、その madhu は古代波斯語の mada 希臘語の μέθυ と關係あることを附記して置く。

#### 四

#### (3) 胡麻と亞麻

ブレットシユナイデル Bretschneider 氏がその『支那植物學』中に胡麻は張鷟が大宛より支那に將來したと記載して以來、一般に信憑されて居るが、實は何等根據のない臆説である。『本草綱目』卷十二に梁の陶弘景を引き胡麻本生大宛とはあるが、決して張鷟が將來したと書いてない。張鷟が胡麻を將來したといふ傳説は、北宋時代から朮まり、その以前には存在して居らぬ。

イラン人は上古より胡麻亞麻を栽培し、又それらの油を利用した。二者ともイラン地方より支那に移植された物と思ふ。たゞその時代は確知し難い。支那人は多くの場合胡麻 Sesame と亞麻 Anis を區別せぬ。支那の記録には不斷にこの二者を混同して居る。こは二者とも外國より移植せられ、二者の種子から何れも油が得られ——支那人は亞麻の

油のみ利用して、その織緯は利用せぬ——従つて二者を通じて同一の胡麻の名稱を使用することも一原因ではあるが、支那の植物學者寧ろ藥物學者は文字の學者で實物の學者でなく、書籍上の穿鑿に熱中する割合に實物上の觀察に冷淡であることも、亦その一原因でなければならぬ。さればこそ一見容易に區別さるべき胡麻 *sesame* と亞麻 *flax* を長い年月に互つて混同したのである。支那人の胡麻を傳へた蒙古人の *Khuma*、日本人のゴマは何れも *sesame* に限られるに、本家の支那人の胡麻は今日主として *Hemp* を指すのは、一種の不思議であるまい歟。

世界の文化を達觀して興味を感ずることは、東洋では上古から麻 *hemp* を衣服の材料に使用して決して亞麻の織緯を使用せぬに對して、地中海沿岸では上古から盛に亞麻を織物の材料に使用したことである。イラン種族及び印度アルヤ種族は麻

に對して同一の名稱——古代波斯語の *bangha* 梵語の *bangha*——を有せるに、歐洲諸國人は全然之と別種の寧ろ土耳其語系に近い名稱を使用する。この事實は麻は *Seythian* の如き古代の土耳其種族の手を経て、歐洲に輸入せられしならんといふ暗示を與へると思ふ。

#### (4) 撒法郎

支那人の撒法郎に關する智識は極めて不完全で『本草綱目』を始め彼等の記録には常に撒法郎 *saffron* と紅藍 *safflower* とを混同して居る。撒法郎 (*Coccus sativus*) と紅藍 (*Carthamus tinctorius*) とは全然別種の植物たること申す迄もない。撒法郎は元時代にマホメット教徒の手を経て始めて物産として支那國內に輸入された。この時代より支那人はこの新來の物産に咄夫藍又は撒法郎の字を當つ。何れもアラブ語 *Zaferan* 又は *Zafran* の音譯である。

支那人は元以前から撒法郎を知つて居つた。歴代の正史に罽賓、天竺、波斯諸國の産物として記載されてある鬱金が即ち撒法郎である。たゞ支那人の記録に見ゆる鬱金又は鬱金香は極めて曖昧であるから、取扱上格段の注意を拂はねばならぬ。

ラッファアー氏の斷案に據ると、支那内地の産物としての鬱金又は鬱金香は Curcuma を指し、印度、印度支那、又はイラン地方の産物としての鬱金又は鬱金香は概して Crocus と認むべしといふ。『翻譯名義集』卷八及び『本草綱目』卷十四に、鬱金香の梵名として茶矩摩を擧げてあるが、この茶矩摩は梵語の Jiganda を訛つた方言 Jigunna に當る。

(5) 耶悉茗

西晋の稽含の作と傳へらるゝ『南方草木狀』に、耶悉茗は大秦國より南海(廣東)に輸入された植物と記載してある。この記事は早くブレットシュナイデル氏やヒルト氏に引用されて、周く學界に知

れ渡つて居るが、ラッファアー氏は今日所傳の『南方草木狀』の内容に疑を挟み耶悉茗に關する記事を後世の擧入ならんとの主張は確に傾聽の價あると思ふ。

支那の耶悉茗又は野悉蜜は中世波斯語即ち *Yē-ḥavī* 語の *yasmin* 又は近代波斯語の *yasmin*, *yasmin* アラン語の *yasmin* と密接の關係あることがわかる。この點から考察しても耶悉茗を大秦から輸入したといふ『南方草木狀』の記事より、波斯から移植したといふ『北戸錄』の記事が信憑すべきに近い。耶悉茗の一名を末利又は茉莉といふは、梵語の *mullika* 西藏語の *malika* 暹羅語の *malik* フメル語の *may*、チャム語の *molih* 等を關係ありと認めねばならぬ。

五

(B) 南洋の波斯國とその産物 (pp. 468-487)  
支那の記録に見えたる波斯にイラン(西域)の波



斯とマレイ(南洋)の波斯とあつて、判然區別せざるべからざるものが、從來兎角混同されて來た。

唐の樊緯の『蠻書』や、鑑眞の『東征傳』に波羅門や崑崙と共に記載されてある波斯は寧ろ南洋の波斯で、西域の波斯ではあるまい。晋の郭義泰の『廣志』に乳香を波斯國の産と記載してあるに據ると、南洋の波斯は唐より遙か以前に支那に知られ居つたものと判定せなければならぬ。乳香は決して西域の波斯國に産せぬからである。又北宋の陳承の、『本草別説』に香の産地として、西方では印度、南方では波斯を擧げ、西方の香は黄色又は白色を帯び、南方のは紫色又は赤色を帯ぶと記してあるがこの波斯國も亦明に西域のそれでない。

唐の段成式の『酉陽雜俎』卷十八に、

紫罌樹出眞臘國。眞臘國呼爲勒佉。亦出波斯國。樹長一丈。枝條鬱茂。葉似橘。經冬而凋。三月開花白色不結子。天大霧露及雨。

沾<sub>二</sub>濡<sub>一</sub>其樹枝條。卽出<sub>二</sub>紫罌<sub>一</sub>。(中略)蟻運<sub>二</sub>土於樹端<sub>一</sub>作<sub>二</sub>巢<sub>一</sub>。蟻墮<sub>二</sub>得<sub>一</sub>雨露。凝結而成<sub>二</sub>紫罌<sub>一</sub>。崑崙國者善。波斯國者次之。

とある紫罌は晋の張勃の『吳錄』に見えた蟻漆である。勒佉はバリー語の [Lac] プラークリト語の [Lak]、チャム語の [Lak]、クフメル語の [Lak]、暹羅語の [Lak]、爪哇語の [Lak] 等に對比すべきものであらう。蟻は所謂 Lac-insect なることを申す迄もない。イランの波斯にはこの Lac-insect が知られて居らぬ程であるから、紫罌樹を産する波斯は勿論南洋の波斯と認めねばならぬ。南宋の周去非の『嶺外代答』卷三に、

西南海上波斯國。其人肌理甚黑。鬚髮皆拳。とある波斯國も亦南洋のそれで、國人の黒身拳髪はマレイ種族又はネグリト種族の明證である。

日本王朝時代の古記録に見えたる波斯人も亦南洋の波斯人であらう。『江談抄』に若干の波斯語の

數詞を收録してあるが、それに幾分の轉訛あるとしても、大體に於てマレイ語系に屬し、決してイラン語系でない。左の對比表を一覽せば思半に過ぐるであらう。

『江談抄』に見えたる波斯語

之に對するマレイ語

一	ササア	1	sa
二	トア	2	dua
四	ナムバ	4	empat
五	リマ	5	lima
六	ナム	6	namu
九	サイビラ	9	sembilan

唐の段成式の『酉陽雜俎』卷十六に波斯謂「牙爲白暗」犀爲「黑暗」とある、この白暗黒暗二個の波斯語も亦南洋語系として解釋することが出来る。ラッファア氏は綿密なる考證を試みて居るが、餘りに専門的に渉るを恐れ茲には引用を見合すことにした。

その位置、物産、言語等より考察して、前掲の波斯國は西域の波斯國と全然區別せなければならぬ。ブレットシユナイデル氏はその『アラブ人に關する支那人の智識』一六頁に、南洋の波斯は西域の波斯の殖民地で、西域の波斯人がスマトラ方面に開いた殖民地が、その本國同様、波斯の名で、支那の記録に載せられたものであらうといふ説を主張して居るが、何等根據のない臆説である。こは支那の記録に見えたる一切の波斯は必ず西域の波斯ならざるべからずといふ前提から出發した議論である。かゝる前提は勿論間違で、西域の波斯の外に南洋の波斯の存在を認めねばならぬ。

さてこの南洋の波斯を何地に擬すべきかは、學界に未だ一定の説がない。ゲリニ Gerini 氏は曾てスマトラの西岸の亞齊アチンに隣接する Lambost 即ち Beu 又は Bas として知らるゝ小國をこの波斯に擬定した。日本の坪井博士はスマトラの北岸に

在る Pasi 又は Pasi と呼ぶ港に擬定した。されど此等の擬定には反對もあり缺點もある。ラッファー氏も南洋の波斯の位置擬定に關する自説の發表を將來に保留して居る。

## 六

(C) 波斯製織物 (pp. 488-502)

こゝには支那の古記録に見えた波斯錦、毳氍、柘辟、越諾布、撒哈刺、火洗布等約八九種の波斯製織物に關する研究を收めてある。中に就いて火洗布には古來東西ともに浪漫的な傳説が多い。従つてその研究に手を着けた學者も尠くないが、著者ラッファア氏が四五年前に發表した「石絨とサラマンデル」——Asbestos and Salamander (Toung Pao, 1915, pp. 299-373)——の一編は、この種の論文中尤も傑出したものである。新著『シノ、イラニカ』中の火洗布に關する記事は、大體に於て前記の論文の補遺に過ぎぬ。故に茲に「石絨とサ

ラマンデル」の梗概を紹介せようと思ふ。

石絨(石綿)で作られた火洗布——火中に投ずると燒燬せずに却つて清淨を加へる即ち火にて洗濯される布の義——に關する支那の記録は略三期に區別される。最古の記録は『魏略』や『後漢書』のそれ——『列子』の湯問篇や、東方朔の作と傳へらる、『十洲記』に在る火洗布の記事は勿論信憑出來ぬ——何れも眞面目で、荒誕の分子がない。當時大秦から支那に將來された火洗布は、火にも燬けぬといふ點で、尠からず支那人の好奇心を煽つた。第二期の西晋より北宋に至る約八百年間は、火洗布に關する種々荒誕なる記事が多い。西晋の葛洪は三種の火洗布を擧げて居るが、その二種は植物性で、一種は動物性である。植物性は姑く措き動物性の火洗布に就いて、葛洪は左の如く述べて居る。

又有白鼠。毛長三寸。居空木中。入火不灼。

其毛可績爲布。(宋高似孫「緯略」卷四所引)

かく火浣布は耐火性の鼠毛にて織製するものとは、西曆三四世紀以後の支那人一般に信せられた所で、宛も中世のマホメット教國や歐洲で石絨はサラマンデルといふ動物の毛と信せられたと一途である。

石絨は夙に希臘羅馬人の古記録、例へばストラボ Strabo、プリーニ Pliny 等の記録中に見えて居る。

火中に在つて何等の損壞を受けぬ怪物サラマンデルのことも、亦古代の文献中に見えて居る。たゞこの石絨とサラマンデルを連結して、石絨は礦物でなく、サラマンデルといふ動物の羽毛から製作される耐火性の織物であるとの荒誕なる傳説は中世時代に一般的となつた。ラッファア氏の考ではこの傳説は恐らくは西曆一二世紀の頃、埃及から西亞細亞にかけて發芽したもので、大秦國から火浣布の將來さるゝと共に、支那に火浣布火鼠説

となつて傳播したものであらうといふ。サラマンデルの名稱は、清初の耶蘇教士南懷仁の『坤輿圖説』に撒辣漫大棘とあるを除き、支那人の記録中には曾て見當らぬが、サラマンデルの名稱が火鼠と變つたのみで、傳説そのものは西方より東漸したものと認めねばならぬ。

荒誕なる火浣布火鼠説は、第三期に當る西曆十一世紀の末頃から、支那の學者間に否定されて來た。北宋末の蔡條の『鐵圍山叢談』や南宋末の周密の『志雅堂雜鈔』には、明に火浣布の鼠毛説を否定し、殊に後者は火浣布の礦物たることをも確認して居る。『元史』卷二百五に據ると、元の世祖は至元四年(一二六七)に阿合馬の獻議に本づき、石絨を採掘して火浣布を製作したといふ。

元時代に支那に觀光したマルコ・ポーロは、東洋で得た新知識によつて、始めて歐洲のサラマンデルに關する迷妄を駁正し、サラマンデルは動物で

なく、地中より發掘せらるゝ石絨その物なるべきを主張した。之が歐洲の學者に可なり大なる影響を與へて居る。

火中に投じてても何等損燬を受けぬ石絨の特質は古來往々宗教的迷信の淵源となつた。『魏書』の西域傳に、魏の高宗が疏勒國王より贈り來た釋迦牟尼佛の袈裟の靈異を驗せんが爲に、之を猛火中に投じたけれども、毫も燒燬せなかつたと載せてあるのも、畢竟石絨製の織物に外ならぬ。佛教徒と同様に、中世の耶蘇教徒も石絨製織物の耐火特質をその祖師の威靈に附會して居る。

(D) イランの礦物、金屬及び寶石 (pp. 503-520)

支那の記録にイラン地方の産と傳へらるゝ、呼洛、礮砂、鑛鉄、瑟瑟、等十二三種を紹介してある。何れも興味ある研究であるが、中に就いて唐宋時代の本草に見えたる密陀僧又は沒多僧とは波斯語の *mindasang* 又は *mundasang* の音譯で、その成

分は酸化鉛なること、又『隋書』『大唐西域記』等に見えたる鑛石とは即ち黃銅で、鑛とは波斯語の *mithra* の音譯なる事は、この二者が時々我が學界にて問題なる點から注意に價すると思ふ。

## 七

(E) ササン政府の稱號 (pp. 529-534)

南北朝隋唐時代の支那の記録に波斯のササン王朝の官職等の名號が尠からず見えて居るがその或者はまだ十分に解釋されず、或者は全然解釋されずに在る。ラッファア氏はこれら名號十餘に就いて新しい解釋を施した。その學界に貢獻する所多大なるべきは贅言を要せぬ。今その四五を左に紹介いたさう。

(1) 薩寶 唐代に國都の長安に火祇教即ちゾロアステル教に關する事務を管掌する爲に薩寶府といふ官衙を置いた。この薩寶といふ名稱の解釋に就いて我が藤田博士は之を薩寶の誤で、薩寶は即ち

ゾロアステルの音譯と認め、那珂博士はゾロアステル教徒の根據地たる康國(サマルカンド)の薩寶水の名に因つたものと認め、又佛國のデヴェリア Devēna 氏はシリア語の *sabā* の音譯と認めて居るが、何れも賛成することが出来ぬ。ラッファア氏の見解ではこの薩寶は古代波斯語の *zaxdāra-pivān* と關係あるべく、恐らくは中世波斯語の *zaxd-piv* 又は *zaxd-piv* の如き音譯であらうと云ふ。

(2) 庫薩和 『隋書』西域傳の波斯國の條に、王字庫薩和とある。この庫薩和は中世波斯語の *zaxdāra* 又は *zaxāra* の音譯で、ソグド語で王の義を有つ *zaxdān* と比較すべきものであらう。

(3) 防步率 『魏書』西域傳の波斯國の條に〔王〕妃曰防步率とある。この防步率は、中世波斯語の *bandušān* 又は *bandūshān* で、アルメニア語の *bandūshān* に相當すべきものであらう。波斯王の配偶者の意味を有つ。

(4) 地卑勃 『周書』異域傳の波斯國の條に地卑勃掌文書とあるが、地卑勃は中世波斯語の *di-pivān* に相當する。*di-pivān* とは文書を扱ふ人の義を有つ。

(5) 薛波勃 『魏書』西域傳の波斯國の條に薛波勃掌西方兵馬とある薛波勃を『周書』異域傳には薩波勃に作る。薩波勃又は薛波勃は何れも中世波斯語の *spāhbed* の音譯で近代波斯語の *spāhbad* に相當する。*spāhbed* とは大將を云ふ。

(6) イラノ、シニカ (pp. 535-571)  
西方より支那に輸入された植物は可なり多いが、支那の植物の西方に輸出されたものも亦尠くない『史記』に支那の弓竹杖が夙に大夏の市場に販賣された事實を記載し、『大唐西域記』に支那の梨と桃とは迦膩色迦王の時代に始めて印度に將來されたといふ。ラッファア氏はかく支那よりイラン地方へ輸出せられ、若くは輸出されたと傳へらるゝ植物、金屬に關する研究、及び支那語より轉訛した

イラン語に關する研究を茲に收録して居る。例の如くその二三を紹介すると、

(1) 支那人は古代から白銅と稱する合金を作つた白銅は銅四〇・四錫二五・四ニッケル三一・六鐵二・六の割合から成る。西曆三世紀の半頃に出た魏の張揖の『廣雅』(『叢書叢書』本卷八上)に白銅謂之「湼」とある。白銅製の支那鏡は中世時代に波斯に輸入された。波斯人は白銅を *Kuweiin* といふ。アラブ語の *Kuweiin* と同様何れも支那石の義を有す。別に白銅に對する波斯語に *istidring* がある。こは支那の白銅を其儘意譯したものと斷せねばならぬ。

(2) 茶は支那が本場で、支那から世界諸國に輸出されたものである。蒙古、土耳其、波斯、印度、葡萄牙、露西亞諸國に共通である。こは支那の茶の轉訛たること疑を容れぬ。されど茶がマホメツト敎國に輸入された年代、狀況等に關する一切の事情は猶ほ明白でない。今日では喫茶の風習が西

方亞細亞に徧つたのは西曆十三世紀以後で、恐らくは蒙古人の手を経て傳播したものとする以上の推測を許さぬ。(『續史的研究』所收「茶の歴史に就いて」參考)

(3) 紙が唐時代に支那から中央亞細亞を経て西亞細亞に傳つた次第は、今日では最早疑を容れぬが、(明治四十四年九月十月の『藝文』に掲げたる「紙の歴史」參考) たゞヒルト氏が波斯語の *Kaghhar* を支那の殺紙の音譯とする説は信憑し難い。波斯で紙を意味する *Kaghhar* 又は *Kaghad* といふ言葉は寧ろウイグル語の *Kaghat* 又は *Kagaskyl* ギズ語の *Ka<sup>gh</sup>as* と關係があらう。此等の土耳其系の言葉はもと樹皮の意味から轉じて、紙を意味するに至つた者である。紙と關係ある紙幣の使用も亦十三世紀の末に支那から波斯に傳つた者であるが、波斯語の *Can* 又は *Canv* は支那の鈔の音譯である。波斯人は紙幣の使用と同時に支那から印刷術をも傳へた

(4) 蒙古人が波斯を支配した時代即ち十三四世紀の間に彼等は尠からず、支那語を波斯に持つて來た。

波斯語の *pirzah* は支那の牌子の譯で、何れも皇帝の使者の携帶する官札である。身分ある官吏の妻を指す波斯語の *pareh* は支那の夫人の音譯で、波斯語で解毒の靈藥と推さるゝ一種の動物を指す *pareh* は支那の骨咄犀の骨咄の音譯である。後者に就いてはラッファア氏に「海馬及び一角魚の齒牙に關するアラブ人と支那人との貿易」と題する興味多き大論文が別に *Touss & Pao* 『通報』に發表されて居るが、遺憾ながら茲にその一端をも紹介することが出来ぬ。

### III 附錄 (pp. 372-387)

左の五項より成る。

- (1) 蒙古語中のイラン語的要素。
- (2) 土耳其語中の支那語的要素。

(3) アブッ、マンスッル、ムヅアファク *Abū Man-sūr Mawālīq* (西曆十世紀の後半に出でたる波斯の醫者)の藥物學書中に見えたる印度的要素。

(4) 羅勒 (*The Basil*) に就いて。

(5) チベット語中の外來語補遺。

こは一九一六年の『通報』に發表した「チベット語中の外來語」と題せる論文の補遺である。

これら各項何れも言語學上有益にして興味に富むが、紙數の制限と、時日の切迫の爲め、すべて紹介を割愛せなければならぬ。

## 八

以上は新著『シノ、イラニカ』の梗概である。著者ラッファア氏は東洋言語學者として著聞して居る。アルタイ語系の言語學に於ても、印度支那語系の言語學に於ても、優に一家をなして居る。加ふるに世界有數の支那學者である。氏がその拔群なる語學力を利用して、必要なる東西の材料を博



引傍搜し、悉く自家藥籠中に收めて、この新著を  
作成したのであるから、その業績が深さに於ても  
廣さに於ても十全なるべきは當然と思ふ。『シノ、  
イラニカ』は畢竟ラッファー氏の該博なる智識と、  
不斷なる努力と、周到なる用意と、卓越せる判断  
の一大結晶といはねばならぬ。吾が輩は衷心より  
我が國の支那學者、東洋學者に向ひ、この稀有の  
好著の一讀を勧誘する。

曩に申述べた如く今回の起稿は紹介が目的で、  
批評が目的でない。されど本書通讀の際ラッファー  
氏の所見と吾が輩のそれと多少相違ある點を心付  
いたから、茲にその二三を開陳して、氏の参考に  
供せようと思ふ。こは所謂和而不同の意で、又贈  
人以言の意に外ならぬ。

(1)張騫の遠征と共に、彼によつて西域の諸植物  
が支那に將來されたといふ傳説は、世間にも學界  
にも可なり廣く信用されて居るに拘らず、隨分疑

惑を挾むべき餘地の多いことが、吾が輩も曾て張  
騫の遠征(『續史的研究』八六一—九〇頁)中に申述べ  
て置いた。ラッファー氏も亦吾が輩と同様、此等  
諸植物の多數は、張騫以後に支那に輸入されたも  
のと認められて居る。たゞ同氏は葡萄、苜蓿の二  
者に限つて張騫自身の携帶將來したものと信じ、  
或は

事實張騫は唯二種の植物—苜蓿と葡萄—を支  
那に將來したのみである。(『シノ、イラニカ』

一九〇頁)

といひ、或は

かくて張騫は大宛にて苜蓿の種を手に入れ、  
西紀元前一二六六年に之をその皇帝に献上した  
(同上二二〇頁)

といひ、更に

張騫によつて彼の祖國に將來された二種の植  
物(彼の將來せし植物は唯この二種のみ)は大

宛の産物である。(同上二二二頁)

といひ同一の主張を反覆力説されて居る。されど吾が輩の所見に間違なくば、『史記』にも『漢書』にも、張騫が苜蓿や葡萄を齎らし歸つた事實を載せてない。『史記』の大宛傳に

漢使取其實來。於是天子始種苜蓿蒲陶肥沃地。

とあるが、この漢使は勿論張騫でなく、事件そのものも張騫の死後に起りしこと疑を容れぬ。現に『漢書』の西域傳には、李廣利の大宛征伐後に、この記事を繋けてある。張騫の遠征は崎嶇間關を極め、大宛より唐居、康居より大月氏、大月氏より大夏と轉々して、殆ど席暖まるに暇なかつた。その歸途は匈奴に捕獲せられ、一年以上も幽囚の後僅に身を以て脱走したのである。是の如き事情の下に、大宛から苜蓿、蒲陶の種實を齎らし來るなどは到底有り得べからざることかと思ふ。苜蓿、葡

萄の二植物が漢の武帝の時代にイラン地方より將來されたことは明白なる事實であるが、その輸入者は張騫でなく、張騫の死後に西域に出掛けた、さる無名の使者と認めねばなるまい。

## 九

(2) 石榴の一名を塗林といふ。ヒルト氏はこの塗林を梵語の *darim* の音譯と認めた。ラッファアール氏は (a) 塗林の古音は *du-lim* で *darim* でなく (b) 又張騫が石榴の梵名を傳ふるとも不思議であるといふ理由で、ヒルト氏に反對し、石榴に對する古代のイラン語は今日に傳らぬが恐らくは *du-lim* 又は *du-lima* 若くは之に類似せるものであつて、塗林は畢竟この佚亡した古代イラン語の音譯と認むべしといふ説を述べられて居る。(シノ、イラニカ』二八二—二八三頁)

いかにもラッファアール氏の説の如く、塗林の古音は確に *du-lim* より *du-lima* に適合する。従つて茲に

石榴に對する言葉に *darim* 又は *darim* と共に *darim* 日が實在した場合に、塗林を以て前者より後者の音譯と認むること當然と申さねばならぬ。されど *darim* といふ古代イラン語の存否不確なる場合、少くともかゝる古代イラン語の存在した確證を缺く場合に、單に塗林の古音の適否に由つて存在不確なる *darim* の音譯と斷ずるは如何であらう歟。形式上より觀ても、かゝる立論方法には多少賛同を躊躇せなければならぬ。

支那人の外國語音譯には一定の法則の存することは事實であるが、如何なる場合でも、如何なる時代でも、この法則は必ず厲行されたものとは認め難い。原則として塗は *tu* 又は *tu* を表はすべきも、時には *tu* 又は *tu* を表はすこともあり得る。

例へば塗と同音同韻である屠又は圖は、浮屠〔三國志〕浮圖〔後漢書〕の場合の如く、明に *tu* 又は *tu* を表はすではない歟。デュリアン氏の『漢字

梵語音譯法』中にも幾多かゝる類似を發見することが出来る。されば一概に塗林の古音は *darim* 又は *darim* の音譯に不適當として排斥し去るべきでない。即ちラッファア氏の第一の非難は絶對正當とは受取れぬと思ふ。

ヒルト氏の張鷟が西域より塗林といふ梵名を傳へたといふ説の不徹底なることは、吾が輩も夙に指摘して置いた。〔張鷟の遠征〕一四九頁〕されど石榴が張鷟とは無關係に、然も南洋から支那に輸入されたものと認めば、ラッファア氏の第二の非難も亦自然に消滅する筈である。支那で石榴に對して塗林といふ字面を使用したのは、吳の陸機といひ梁の元帝といひ、〔漢魏六朝百三名家集〕所收『梁元帝集』詠石榴詩〕何れも南支那人に限る。此事實は塗林といふ名稱は南洋を経て先づ南支那に傳つたといふ想像に若干の根據を與へるであるまい歟。石榴の梵語は *darima* 又は *darima* でヒンド

語は *darim* テルグ語は *dachina* 馬來語は *calima* チャム語は *calim* クフメル語は *calim* である。何れも塗林の音と若干の類似を有つ。此等の事實から推して、吾が輩は石榴は陸路からも支那に輸入されたが、同時に海路からも支那に輸入され、この海路から塗林といふ名稱が南支那に傳はつたらしく考へる、塗林を必ず古代イラン語とする必要ないかと思ふ。

後魏楊街之の『洛陽伽藍記』卷四の白馬寺の條に寺前の石榴を指して奈林といふ。已に吾が輩の「張鷟の遠征」中に述べて置いた如く、この奈林は塗林と同じく *dalima* (*dalim*) の音語であらう。ラウフアー氏は不幸にして『洛陽伽藍記』のこの一節を見落して居る。

(3) ラウフアー氏は蒙古に於ける葡萄酒の來歴を述べ『間影樓輿地叢書』所收の南宋の彭大雅、徐霆共著の『黑韃事略』を引用する際に、この書を蒙古

の風俗慣習を知るべき最古の記録と注意を加へて居る(『シノ、イラニカ』三四頁)『黑韃事略』は蒙古の風習を知るべき古記録の一ではあるが、必しも最古とはいへぬ。元末の陶宗儀の『說郛』局五十六に收むる所の南宋の孟珙の『蒙韃備錄』の方が確に古い。その本文に蒙古の年號を使用した次第を述べて、

自去<sub>レ</sub>年<sub>二</sub>方改曰<sub>レ</sub>庚辰年。今日<sub>二</sub>辛巳年。

とあるに由つて推斷すると、『蒙韃備錄』は南宋の寧宗の嘉定十四年辛巳歲(西曆一二二二)の作で、『黑韃事略』の編著に先つこと正に十六年に當る。孟珙は親しく蒙古の有力者と接近し、當時に聞えた蒙古通であるから、その所傳の信頼すべきこと申す迄もない。『黑韃事略』が太宗窩淵台時代の風習を述ぶるに對して、『蒙韃備錄』は太祖成吉思汗時代の風習を傳ふ。兩々相須つて蒙古國初の風習を知るべき重要な材料を供給する。

『蒙韃備錄』に蒙古人の飲食を記して、

其爲「生涯」止是飲「馬乳」以塞「饑渴」。

といふのみで、王公貴人の間にも曾て葡萄酒の飲用された形跡が見當らぬ。こは正しく成吉思汗の西域征伐に着手する頃の有様であらう。『黑韃事略』は蒙古が已に西域を征服せし後であるから、徐霆は、

兩次金帳中送葡萄酒。盛以玻璃瓶。一瓶可得十餘小盞。其色如南方柿汁。味甚甜。聞多飲亦醉。但無緣得多耳。回々國貢來。

と記したのである。徐霆より約十年後に、蒙古の王庭を訪うたカルビニ Carpin は、蒙古人の飲料は馬乳が主と、時に葡萄酒もあるけれど、こは皆遠國より送り來るものに限るといひ、その後更に八年を経て蒙古に往つたルブルック Rubruck はその王公の帷幕中に赤葡萄酒を使用せし事實を述べ、何れも徐霆の記事と相發明するに足ると思ふ。ロ

ックヒル氏は蒙古人は赤葡萄酒は常用せぬ筈故、ルブルックの所謂赤葡萄酒とは、或は紅茶を指すならんかとの疑惑 (The Journey of Friar William of Rubruck. p. 186) は採るに足らぬ。要するに蒙古人の西域征服と共に東洋の喫茶の風が西漸した如く、西域の葡萄酒は次第に蒙古人間に需要さるゝに至つたのであらう。

## 十

(4) 唐の杜環—『諸蕃志』等に杜環に作る—に『經行記』がある。杜環は玄宗の天寶十載(西曆七五二)の怛邏斯 Tansu の戰役に捕虜となり、大食に滯留すること約十年間、歸朝の後ち、この『經行記』を作つた。杜環の族父に當る杜佑の『通典』卷百九十一に、

族子(杜環)隨鎮西節度使高仙芝西征。天寶十載至(西海)、寶應初(西紀七六二)因賈商船舶。自廣州而回。著『經行記』。

と紹介してある。『經行記』の全書は今日に傳はらぬが、『通典』の中に部分的に引用されて居る。吾が輩は大正三年五月の史學研究會で、この『經行記』の本文に就いて校勘と解釋を加へて置いた。

その後一年有餘を経て出版された、中華民國の丁謙の『浙江圖書館叢書』第二集に、「唐杜環經行記地理攷證」一節を收めてあるが、誤謬滿幅殆んど參考の價値がない。

杜環は西域滞在十年の間に、可なり精細なる見聞を遂げた。ラッファア氏が『唐書』の西域傳から譯出した阿弗利加東岸の磨鄰國に關する記事も、實はこの『經行記』から出た材料で、『唐書』は『經行記』の本文を可なり誤謬多く抄録したに過ぎぬ。『經行記』には西域地方の動植物産等に就いて參考すべき記録を傳へて居る。例へば大食國に關しては、

香油貴者有二。一名耶塞漫。一名沒匠師。

香草貴者有二。一名查塞奉。一名敦盧凌。

といふ。耶塞漫は勿論 Yasmin 又は Yasinin の音譯で、沒匠師は『周書』の無食子、『酉陽雜俎』の無石子、『諸蕃志』の沒石子と同じく、近代波斯語の *Miziz* に近い中世波斯の音譯と見るべきであらう。敦盧凌は『本草綱目』の胡蘆巴と對比すべきもので中世波斯語の *hiban* の音譯に相違ない。查塞奉は『太平寰宇記』に引いて、查寒奉とあるが、何にしても如何なる植物で又如何なる波斯語の音譯なるかは知ることが出来ぬ。

ラッファア氏の新著に殆ど一切の文献を博引されてあるに拘らず、この『經行記』を漏されたのは遺憾である。吾が輩はラッファア氏の能力は前記の查塞奉は勿論、その他『經行記』に見える各種のイラン植物に對しても、容易に十分なる解釋を與へ得べきを確信する。

(5) 悉々と稱する西域の寶石は唐前後の正史野乘

に多く散見する。張揖の『廣雅』に瑟瑟碧珠也とあるに據ると、碧玉 Emerald の一種と思はれる。天寶十載の怛邏斯の戦役も、實は安西節度使の高仙芝が石國の瑟瑟十餘斛を貪り取つたのが一原因であつた。ラッファアー氏はテストル教徒がその寺院の裝飾用として多量の瑟瑟を支那に將來したものと斷じて居る。『シノ、イラニカ』五一六頁)

宋の姚寬の『西溪叢語』卷上に、  
杜甫石笋行云。君不見益州城西門。陌上石笋雙高蹲。古來相傳是海眼。苔蘚蝕盡波濤痕。

雨多往々得瑟瑟。此事恍惚難明論。恐是昔時卿相墓。立石爲表今仍存。(中略)舊說昔爲大秦寺。其門樓十間。皆以眞珠翠碧貫之爲簾。後毀。此其遺跡。每雨後入多拾得珠翠異物。

とある記事はラッファアー氏の所説に確たる根據を與へる。博覽多識なるラッファアー氏のごとく、或

はその所説も『西溪叢語』の記事に基きしもの歟と試に照會した所、最近の返信に據ると、この記事は早く氏が發見して、數年前に公にした「東洋に於ける<sup>トルコオイズ</sup>璵玉に就て」と題する論文中に引用してあるさうで、今更ながら氏の博識に驚嘆する外ない。

(6) ササン王朝の稱號の解釋には、固より正確にして動かすべからざるもの多いが、中には一二疑惑を挟むべきものもある。『隋書』に見えたる波斯王の庫薩和の如きその一例である。已に述べた如くラッファアー氏はこの庫薩和を中世波斯語の *Kasāra* の音譯と認めらるゝが、吾が輩は寧ろシァヅァンヌス *Chavannes* エルト二氏と共に波斯王 *Khosrau* の音譯と認めたい。

イランの王名の明白に支那の正史に登錄されたのは『後漢書』西域傳に、和帝の永元十三年(西曆一〇一)に、安息王滿屈復猷(師子及條支大鳥)とあるが最初である、ヒルト氏もシァヅァンヌス氏も滿屈

を *Pakor* (78-108) の音譯と認む。されど滿屈その儘にては *Pakor* の音譯に擬し難い。吾が輩は滿屈を滿屈の誤と認め、その滿屈を以て *Pakor* の音譯に擬すべきものと思ふ。

『魏書』西域傳に後魏の神龜年中 (518-520) に波斯王居和多が貢獻したと記してある。居和多は申す迄もなく *Kobad I* (502-531) の音譯と認めねばならぬ『舊唐書』西戎傳に波斯王庫薩和爲西突厥所殺。其子施利立とある。施利は *Sioes* (628-62) の音譯たること疑ない。居和多が *Kobad* の音譯施利が *Sioes* の音譯ある以上、庫薩和を *Khosrau II* (590-628) の音譯と認むるのが當然であらう。庫薩和の和を利の誤とせば、庫薩利は *Khosrau* の音譯として不都合がない。ラッファアー氏は『隋書』に據つて庫薩和を波斯王の種號と認むれど、新舊の『唐書』に據ると庫薩和は波斯王の名で、稱號と認めることが出来ぬ。

ラッファアー氏は又薩寶を *śaśa-pāva* の如き中世波斯語の音譯とし、庫薩和を *śaśava* の音譯として、同一の *śaśa* に對する支那の音譯に一は庫薩、一は單に薩を用ふる相違を推測して、前者は隋代即ち西曆六世紀の後期の音譯、後者は西紀六百廿一年頃の音譯故、音譯の相違はこの時代の相違に基づくならんと説明して居るが、『シノ、イラニカ』五二九—五三〇頁) 之も幾分信じ難い。薩寶府の設置は唐の武德四年 (西曆六二二) であるから、薩寶の音譯の時代は間違ないとして、隋と波斯との交通開始は煬帝時代即ち西曆七世紀の初期に當り武德四年を距ること僅々十年に過ぎぬ。殊に新舊の『唐書』にも庫薩和の字面があるから、庫薩和の音譯の年代が、薩寶のそれより古いとは斷じ難いと思ふ。

## 十一

(7) 支那の國號の起源に就いては異説が多い。大



體に於て明末の耶蘇教士衛匡國 Martin Martini 氏の説即ち秦を以て支那といふ國號の起源であるとすする説が一番有力であるが、之に反對する學者もある。現にラウファー氏の如きも一度はこの説に反對の態度を示した。(Toung Pao, 1912) 秦の古音が古代の希臘人や印度人や波斯人の間に支那の國號として傳へらるゝ  $\text{C}^{\text{h}}\text{E}$  又は  $\text{S}^{\text{h}}\text{E}$  の音と一致せぬことが、その反對論の根據であつた。秦説を主張する學者も、今日まで未だ十分にこの難點を解説して居らぬ。今回ラウファー氏は新に秦の古音は  $\text{C}^{\text{h}}\text{E}$  又は  $\text{S}^{\text{h}}\text{E}$  なるが、發音法則に準じてイラン語の  $\text{C}^{\text{h}}\text{E}$  に轉訛し得べきを主張し、この主張に由つて、秦を支那國號の起源とする説に賛同して居る。(『シノ、イラニカ』五六九—五七〇頁)

秦の古音を  $\text{C}^{\text{h}}\text{E}$  と認定するラウファー氏の説は、確に傾聽に價すると思ふ。後世  $\text{C}^{\text{h}}$  又は  $\text{S}^{\text{h}}$  の音を有する漢字は少くとも漢時代までは  $\text{C}^{\text{h}}$  又は  $\text{S}^{\text{h}}$  の音を有した。例へば月氏の古音は提であつた。『識小類編』卷五) 天竺の竺の古音は毒又は篤に近い。『漢書西域傳補注』卷上) かゝる例證は一々枚擧するに堪へぬ。清の錢大昕はこの事實を歸納して、現讀舌上音 (  $\text{C}^{\text{h}}$  ) の如き) 的の字。古音都讀舌頭的音 (  $\text{C}^{\text{h}}$  ) 又は  $\text{C}^{\text{h}}$  の如き) と斷案を下して居る。『北京大學月刊』第一卷第五號所收「清代漢學家的科學方法」參看) 吾が輩が從來學界の通説であつた大夏の藍市城と大月氏の監氏城との同一説を排斥して、監氏を  $\text{C}^{\text{h}}\text{E}$  又は  $\text{S}^{\text{h}}\text{E}$  の音譯と認め、之をサマルカンドに擬定した(『張騫の遠征』一二九—一三〇頁) 一理由も亦實に茲に在る。従つてラウファー氏が秦の古音を  $\text{C}^{\text{h}}\text{E}$  とする斷案には勿論賛成せなければならぬ。たゞ舌頭音 dental の漢字が舌上音 palatal を有するに至つた時期が一大問題である。

吾が輩は曩にラウファー氏宛の私信中、この問題について、

古代の秦の字音に關しては慎重なる研究を要すると思ふ。Lalta-Yistura 中の梵名 China に對して、西晋時代の『普曜經』には秦の字を當てゝある。又『三國志』に三韓の一なる辰韓を或は秦韓とも書するより推すと、少くとも當時辰秦の二字は同一の音を有せしものと認めねばならぬ。然るに後漢の獻帝の建安十年(西曆二〇五)に渡天した成光子の記録の一部が、唐の道宣の『釋迦方志』中に引用されて居るが之には梵名 Cinstan に振(=辰)旦の字を當てゝある。此等の例證から推測すると、後くも西曆三四世紀の頃に、秦の字音は  $\text{tʃin}$  か若くばそれに類似した様である。果して然りとせば秦の字音は、より直接に、より容易にイラン語の  $\text{cin}$  の音と一致し得ると思ふ。

と申送つた。之に對してラッファア氏の返信に、  
秦の古音の舌頭音  $\text{dʒin}$  たることを疑を容れぬ。

現在舌上音  $\text{Palatal sibilant}$  を有する漢字は硬軟の區別なく、すべて舌頭音  $\text{dental}$  から進化分派したもので、殆ど一の例外がない。舌頭音が先づ濁れる舌上音  $\text{Palatal sonorant}$  となり、更に清める舌上音  $\text{Palatal sibilant}$  となつた。即ち秦の字音に就いていへば  $\text{cin}$  が  $\text{tʃin}$  又は  $\text{tʃin}$  となり、更に  $\text{dʒin}$  と變つたのである。土耳其語、西藏語、イラン語等の關係から歸納して、支那で清める舌上音の成立したのは唐末か唐以後と斷せねばならぬ。唯舌頭音が濁れる舌上音に變じた時代は未だ確實に決定し難い。貴下の提供された記録から判斷すると、西曆一二世紀の頃から、秦の古音が舌上音に變つた様である。但しこの場合秦は舌上音としても  $\text{dʒin}$  ( $\text{dʒin}$ ) にして  $\text{cin}$  でない。こは漢字音韻學上重大なる問題である。自分は遠からず之れに關する研究を發表したいと心掛けて居る。

と申越された。實をいへば吾が輩の漢字の古音に關する智識は極めて貧弱である。第一比較言語の素養を缺ける吾が輩は、科學的に漢字の古音を論ずる資格すら備はらぬかも知れぬ。漢字の古音問題は正しくラッファア氏得意の壇場と思ふ。吾が輩は氏の豫約せる研究の發表に對して多大の期待を有つて居る。

吾が同僚の矢野博士は「茶の歴史に就て」と題せる論文中に、茶(茶の古字)の古音に關する研究を發表されて居るが、この茶の古音も、上掲の漢字の音韻進化論の一部分として取扱はれねばならぬ。『漢書』に見わたる茶陵の茶の古音に就いて、唐初の顏師古は二種の解釋を與へて居る。即ち一方では茶音塗『漢書』卷十五上と註し、一方では茶音丈加反『漢書』卷廿八下と註す。顏師古に従へば茶に舌頭と舌上の二音あることを承認せなければならぬ。顏師古は班固の『漢書』を編成した時代の音を註したものが、又は東漢より初唐に至る或る

時代の音を註したものが、今日では容易に決定し難い。たゞ少くとも唐初に茶の字に已に舌頭音と舌上音と並び存したことだけは明瞭である。

さて唐初に茶の字に舌頭舌上の二音ありとしてその舌上音がㄊ(ㄊ)の如く濁るべきか、又ハの如く清むべきかは、顏師古の註だけでは、勿論之を決定する事が出来ぬ。されど西曆九世紀の半頃のソレイマン Soleiman の記録に、茶(茶)に對して Sakh (Cakh) の發音を與へて居る(Reinaud; Relation des Voyages, tome I, p. 40) より推すと、唐の中世には已に茶が清める舌上音を有せし様に思ふ。尙ほ秦の字音とㄊとの關係を研究するに當つては秦といふ名稱を支那より印度イラン方面に傳播した中間民族が、南徼の馬來種であるが、北塞の土耳其種であるかを、一應考慮する必要があると思ふ。

## 十二

(8)最後に『シノ、イラニカ』通讀の際、目に觸れた四五の小誤謬を茲に收録して、この稿を終結し

たい。

(a) 二三四頁に『黒龍事略』を引用せる一節に聞多飲亦醉。但無緣得多耳とある所が、多少誤譯されて居る歟と思ふ。無緣得多とは、葡萄酒は西域の産で、蒙古では多量の葡萄酒を手に入れ難く、従つて之を多飲して酔酩に至る場合の稀少なるを申したのである。

(b) 二七八頁に西晋の陸機の與弟雲書を引いてあるが、與弟雲書に對するラッファー氏の解釋が間違つて居る。こは陸機より彼の弟に當る陸雲に送呈した簡牘であらねばならぬ。

(c) 二七九頁に『獨異志』の著者を唐の李尤又は李元としてあるが、之は唐の李冗又は李元と改むべきであらう。『四庫全書總目提要』卷百四十四參看) (d) 二八九頁の註一に、存中を宋の沈括の號とせるは、勿論字の誤である。

(c) 三八一、三九七、四〇二頁等に西域の地名として擧げた末祿は疑もなく Murch(Mary) の音譯である。

(f) 四八八頁に安西を安息と同様に Arsalak の音譯と見做し Partina と註してあるが、こは下文の北庭と相對し、安西の節鎮を指すのであるから Partina を改めて龜茲 Khenk と註せねばならぬ。

(g) 四九四頁に胡旋女を解釋して Kwarisan 産の儷女となし、胡旋を Kwarisan といふ地名の音譯と認めて居るが、之は信憑し難い。シャヴァンヌ氏も亦曾て胡旋女を正解し得なかつた。(Documents sur les Tonkin Occidentaux p. 136) 胡旋女とは胡地の産にて旋舞を行ふ女子を指す。唐の段安節の『樂府雜錄』(『說郛』局一百所收)に

舞有骨塵舞、胡旋舞。俱於一小圓毬上舞。縱橫騰踏。兩足終不離於毬子上。其妙如此也。とあるを參考すべきである。

此等些細な誤謬は所謂白玉の微疵で、殆どラッファー氏の新著の價値に關係せぬが、若し他日の新著に校正を加へる機會に、吾が輩の所説をも參考に供せらるゝならば、當に吾が輩一個人の満足に止らぬと思ふ。(六月三日)